■史料紹介

日本社会主義者とコミンテルン・アムステルダム・サブビューローとの通信，1919-1920年

山内　昭人

ま　え　が　き
Ⅰ　在米片山潜とリュトヘルス
Ⅱ　在横浜杉山正三とリュトヘルス

ま　え　が　き

1998年７月と９-10月に編者は，アムステルダムの社会史国際研究所（IISG）とモスクワのロシア現代史文書保存・研究センター（РЦХИДНИ [ルツヒドニ]; 最近同センターは再び名称を変更したが，便宜上元のままにしておく）をそれぞれ訪れた。旧マルクス-レーニン主義研究所のアルヒーフを引き継いだルツヒドニの未公開史料の閲覧・複写がその目的の調査だったが，先に IISG を訪れたのは，そこでは研究所間の協定により，オランダ関係を中心にかなりの量マイクロフィルム化されたルツヒドニのアルヒーフ史料が一般利用に供されており，それらのコピーを短期間に大量に，かつ廉価で入手するためであった。その事前の準備の故に，ルツヒドニでの週二日しか閲覧日がないという極めて非効率な作業にもかかわらず，まがりなりにも当初の目的をほぼ果たしえた。その目的とは，コミンテルン・アムステルダム・サブビューロー（1919-1920年）関係史料と，片山潜を中心とした日本社会主義者と初期コミンテルンとの関係史料を追求することであった。それでもなお，請求した史料のうち，非公開のものや理由もなく閲覧できなかったものもあり，本史料紹介は標記のテーマに関する基本史料ではあっても，網羅した調査を経たものではないことを予め断っておく。

本来ならば史料を原文（英文）のまま公表したいところだが，ルツヒドニより原文公表の許可を編者は得られなかった故に，やむなくその摘記要約というかたちで内容紹介をせざるをえない。にもかかわらず，ここに紹介される内容によって多くの事柄が明らかにされるであろう。引き続いて，在墨片山潜の書簡および原稿類も紹介される予定である。

史料紹介のしかたは，次のとおりである。二種類の史料をそれぞれ日付順に並べ，通し番号を付し，最初に各史料データを原文で記す。続いて，摘記要約したものを列記する（その際多くはないが，アメリカ共産主義運動に関する論評等についてはテーマの性格上おおかた割愛している）。そのあと，それぞれ解説および注を付す（ただし，最小限の注は本文に［　］を付して挿入する）。

今回紹介する史料のアルヒーフ番号は，すべてフォント（фонд）497，オーピシ（опись）2，

ジェーロ（дело）2（本文では497/2/2と略記し，そのあとにリスト［лист］番号が続く）であるが，フォント497はコミンテルン執行委員会附属アムステルダム・サブビューロー（実際のアルヒーフ表記では，臨時アムステルダム・ビューロー）に割り当てられた番号で，元の史料は明らかに同サブビューローの書記Ｓ.Ｊ.リュトヘルスの手元にあった大本の史料であり，例えば当時拮抗していたベルリンの西欧書記局の史料（フォント499）と比べて格段に充実している。同フォントは二つのオーピシから成り，オーピシ１には同サブビューローの機関紙，声明，出版等活動報告書類が11ジェーロに分かれてあり，オーピシ２は各国社会主義者等との通信文書類で，大よそ地域・国別に11ジェーロに分かれてある。後者のジェーロ２は，同サブビューローとアメリカ合州国，イギリス，オーストラリア，カナダ，日本，南アフリカの各共産主義政党の指導機関との通信文書類（1919年４月～1920年９月）である。

Ｉ　在米片山潜とリュトヘルス

Ｉ-①　1919年12月22日　K[atayama]/1947 B[road]way, N.Y.City [1] to S.J.Rutgers
Российский Центр Хранения и Изучения Документов Новейшей Истории［hereafter cited as РЦХИДНИ］, 497/2/2/15-18 (4×; autograph)

・たいそう多くの興味深い経験後あなたが無事帰国した [2] との便り［未詳］をもらい，ほんとうにうれしい。モスクワ滞在時のあなたからM夫人 [3] への書簡での，私への親切な伝言も受け取った。
・私は合州国を離れようと試みたが，日本政府は私が離米することを妨げた [4]。
・アメリカ共産党は最大に厳しい検閲のために活動できない。ロシア・ソヴェト・ビューロー [5] は妥協的な立場に立ち，社会党や共産主義労働党に味方している。Fr.［フレイナ］氏から事情についてより多くをあなたは聴くであろう。私は彼に全幅の信頼をおいている [6]。
・日本では1918年８月の米騒動以来，ストライキとサボタージュが非常に多く続いている。人民のミカドへの信仰は今や去ってしまい，日本が社会［主義］的国家になるのは時間の問題にすぎない。中国（南部）はほとんどそうであるし，朝鮮人たちはそれを採用するのを待ちかまえている。約３万の兵士は，たいてい日本人小作農だが，今シベリアでボリシェヴィキの学校の中におり，彼らはソヴェト体制を去り，急速に日本中に広がりつつあり，それで日本における展望は非常に有望である。
・日本の同志がＣ.Ｐ.［共産党］のために行動していることはうれしい。しかし，彼らは大変抑圧され，公然とは何もできず，非合法下で行動している。
・『平民』については，日本語の部分を印刷できず，先の８月以来刊行していない [7]。

アムステルダム・サブビューロー時代のリュトヘルスへ片山が送った最初の書簡がこれになる。先に編者は下記のＩ-③がオランダ共産党日刊紙『トリビューネ』に一部公表されたのを最初の書簡とみなしたが，ここに訂正される。A.Yamanouchi, “ Sen Katayama, S.J.Rutgers and H.Sneevliet,

1916-1921: In Reprinting Nos.1-6 of *The Heimin,*" *Memoirs of the Faculty of Education, Miyazaki University*, Social Sciences, Vol.66, IX.1989, 29-30.

（1） リュトヘルス一家が1918年４月に離米したあと，片山は「W.L.Hess 夫人の料理人として」ニューヨーク市東79丁目161番地に住み込み，「事務所をもたない間，彼の郵便はニューヨーク市ブロードウェイ1947番地の近藤という人を通じて受け取られ」，その628号室が『平民』の発行所となった。Correspondence of the Military Intelligence Division of the War Department General Staff, 1917-1941, RG 165 [hereafter cited as Correspondence of MID], File No.10175-396-7, National Archives and Records Administration [NARA], Washington, D.C.; ibid., P.F. File No.49042-14; 『平民』15号, IV.1918. その近藤栄蔵が1919年５月に帰国する際，そこを「そつくり片山に譲つた」。近藤栄蔵『コムミンテルンの密使　日本共産党創生秘話』(文化評論社, 1949), 69.

（2） コミンテルン執行委員会ビューローの1919年９月28日の決定にもとづきレーニンから西欧におけるコミンテルン一支部の設立を委任されたリュトヘルスは，オランダ国境の街（Oldenzaal）に24時間足止めされたあと，1919年11月５日にアメルスフォールトの（一足先２月半ばにある使命をおびて帰国していた）妻バルタの元に到着した。РЦХИДНИ, 495/1/1/78; S.J.Rutgers aan W. van Ravesteyn, 6.XI.1919, Archief W. van Ravesteyn, Map 17, IISG, Amsterdam. 病み上がりの体を休める間もなくリュトヘルスは，そのアムステルダム・サブビューローの設立をめざしてロラント-ホルスト，ウェインコープ，パネークークらとともに活動を開始した。

ここで本テーマの根幹に触れる事項を付記しておけば，同サブビューロー指揮のもとで1920年２月上旬アムステルダムで開かれた国際会議において，フレイナ（下記注６参照）によって提案され，採択された決議の中に掲げられた同サブビューローの職務の一つに，以下があった。「５．日本および極東における活動，そしてそれらとの連絡のために，一日本人同志の協力を確保する」こと。「一日本人同志」とは明らかに片山潜をさしており，そのことは，同じく同会議に出席したマーフィ（J.T.Murphy）がイギリス人同志（A.McManus）へ宛てた２月15日付書簡における以下の記述で確認される。「極東におけるそのような［各地のビューローのような］一組織の発展を企てるために，片山に対して手はずが整えられるべきである。」*Bulletin of the Sub-Bureau in Amsterdam of the Communist International* (Amsterdam), No.2, III.1920, 8-9; РЦХИДНИ, 581/1/110/20-35.

（3） 十中八九メアリ・マーシィであろう。そのことは以下で傍証される。彼女が Mrs. R.［リュトヘルス夫人バルタ］に宛てた1919年８月26日付書簡の中に，「私はあなたの手紙を片山に送るか，あるいはあなたが送るすべての知らせを彼に書き送るだろう」とある。ちなみに，この時は片山の著書［*The Labor Movement in Japan*］10冊の送付依頼であった。РЦХИДНИ, 497/2/2/229-230.

（4） 片山自身の証言によれば，1918年末に渡欧が禁じられた。また官憲報告によれば，1919年２月にも同様なことがあった。山内昭人『リュトヘルスとインタナショナル史研究――片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウィング――』（ミネルヴァ書房, 1996), 114. さらに，

1919年春にも片山が渡欧を試みたことがアメリカ軍情報部報告（1919年４月16日付）に記録されており，それはリュトヘルスにも関わる記述なので，ここに紹介しておく。情報源はニューヨークの日本領事館で，片山が３月半ば頃同領事館に，コペンハーゲンに行くため旅券を査証してもらいに来た。片山が言うには，その地からモスクワに行き，友人のリュトヘルスと合流するつもりだとのこと。当初日本領事館によって，コペンハーゲンの社会主義大会で日本社会主義者を代表するために行くのではと疑われたが，片山はそれを否定した。この国で自分は非常にうまくいかないので，リュトヘルスによってかつて約束されたよい仕事を得るためロシアに行く途中の立ち寄り先としてであると。今のところこれに関する報告が同領事館から外務省に報告されたであろう文書も見つけられず，事の真偽を確かめられないが，片山の領事館訪問の事実は否定できないのではなかろうか。Correspondence of MID, PF49042-10.

（５）　1919年１月初め，マルテンスがソヴェト政府の合州国代表に任命され，合州国政府の正式承認が得られないまま，４月初めにビューロー（Russian Soviet Government Bureau）がニューヨークに開設された。同ビューローは商業部や情報部などをもち，商業・貿易に力を注いだことにより革命運動との関係で，本書簡でも触れられているようにアメリカ・レフトウィング内で評価が分かれた。アムステルダム・サブビューローも同ビューローの活動について懸念を表明することになる（リュトヘルスのマルテンス宛1920年１月16日書簡。РЦХИДНИ, 497/2/4/9-13; *The Communist* [Chicago], Vol.2, No.6, 1.VI.1920, 3, 8）。

（６）　フレイナはアメリカ共産党国際書記として自ら1920年夏のコミンテルン第２回大会出席のため訪ソすることになり，途中アムステルダム・サブビューローを訪れ，上記（注２）国際会議に出席した。フレイナと片山，そしてリュトヘルスの三者の交流は密で，互いの信頼感は揺るがぬものであった。そのことは，フレイナが（ロシア・ソヴェト政府ビューローの密使で，実はアメリカ司法省の密偵であった）ノソヴィツキー（Jacob Nosovitsky; Harry Nosowitsky）の手引きで密航し，上記国際会議にも彼を同伴したあおりでフレイナ自身にスパイ容疑がかけられた時も，同様であった（Ⅰ-⑦参照）。また，フレイナ離米後は彼に代わって当時内縁の妻であったジャネット・パール（Jeannette D. Pearl）がアメリカの情報をリュトヘルスに伝える役割を果たすことになり，３月７日には彼女は“J”のサインで「踊り子の父親［片山］が街を去ってしまった」ことを伝えている。РЦХИДНИ, 497/2/2/48.

（７）　『平民』は1919年７月に22号が刊行され，それが終刊とみなされている。

Ⅰ-②　1920年２月24日　K[atayama]/Somewhere in Atlantic City[1] to Mr.R[utgers]
РЦХИДНИ, 497/2/2/45-46 (4×; autograph)

・１月３日に我が家を離れ，［ニューヨーク］郊外に３日間とどまり，それからアトランティック・シティに来た。スペイン風邪が私の知っている誰にでも襲うほど猛威をふるっていた。私は同国人の一人の家で過ごし，スペイン風邪に細心の注意を払った。あなたも知っているように，その熱に耐えられるほど私は健康でない。

・F.［フレイナ］があなたと一緒にいることを知って，うれしい。
・私の友人でありＦ.氏も私が名前を告げたので知っている石本[2]が，ストックホルムから私に二度書いてきた。当地で彼はＳ.[3]と会い，今フィンランドのヘルシンキにいると信ずる。彼が言うには，そこからレヴァルに戻り，それから［ロシア］へ行くつもりだ。私は彼にＴ.Ｋ.Ｂ.[4]への紹介状を与えた。
・今，日本は目覚めつつあり，人民は不安で，自分たちの権利を要求している。ストライキとサボタージュの件数は増えつつあり，釜石鉱山ではストライキのため300名が逮捕された。
・二人の大学教官がクロポトキンの相互扶助の思想を訳した故に解雇された。マルクスの『資本論』が３名によって別々に訳され，三つの訳書が同時に出現しつつある。
・排日運動は今，ほとんどすべての労働組合の中で再び強くなった。我が同輩はその運動のために大変苦しんでいる。その運動が日本の軍国主義者に軍備増強の口実を与えることを私はおそれる。
・ハワイとアメリカにおける日本人労働についてすぐに書くつもりだ。私はあなたに一部送るつもりなので，あなたはそれを来るべき合州国と日本との衝突への抗議へ世界の労働者を動かすために利用してもらいたい。

（１）　c/o Mr. Naito[内藤勘三郎], 2115 Boardwalk, Atlantic City, N.J.　二村一夫「片山潜の未発表書簡について－「パーマ・レイド」前後とモスクワ便り」『資料室報』(法政大学大原社会問題研究所), 259号, X.1979, 7.

（２）　男爵石本恵吉は，1914年に東京帝国大学工科採鉱冶金科を卒業し，三井鉱山に入社し，４年後，鉱業視察の名目でシベリア，満州を巡視し，さらにメキシコに渡った。当地で1919年春，兵役忌避のため亡命していたアメリカ急進主義者ゲイル（Linn A.E.Gale）の知遇を得，そして「三井物産会社の鉱業部の技師として，メキシコにコンセッション（利権）を獲るために渡米した」石本は，「ゲリー［ゲイル］から伝書を持つてこゝへやつて来たのでニユウヨークでも多くの首領達は私的に親しく交つてゐた」。田口運蔵「亡命者」『解放』５巻７号, VII.1926, 52; 参照, 丘辺査[杳]「『彼』＝国際労働会議のエピソード＝」『新社会評論』７巻５号, VII.-VIII.1920, 21.

石本と片山の交流の経緯については，石本自身が当時ゲイルが編集・刊行していた月刊誌『ゲイルズ・マガジン』へ寄稿した論文に記されている。それによると，1919年６月２日，石本はアメリカにおけるソヴェト・ロシア政府の非公式代表マルテンスと接見し，持参したゲイルからの書簡をマルテンスに手渡し，『ゲイルズ・マガジン』もみせた。石本はマルテンスに，シベリアでの自らの経験により，ボリシェヴィズムが実際には破壊的ではなく建設的であることのいくつかの証拠をみ，そのソヴェトの制度の実行可能性を確信していることを伝えたが，ロシアにおける現実の活動についてより多くをマルテンスから聞くことを欲した。それに対して，マルテンスはニューヨークに今住んでいる片山に会うよう助言した。この助言によって石本は，片山と会うことになった。両者の交流はその上，片山のメキシコとの関係を深めることになった。その最初は，『ゲイルズ』1919年10月号への片山の寄稿であり，そ

の書き出しは，「『ゲイルズ』を通してメキシコの同志およびメキシコ人民全体に初めて話しかけることは，私に大いなる名誉と喜びを与える」だった。K.Ishimoto, “ Order Reigns In Soviet Russia, ” *Gale's Magazine* (Mexico City), Vol.2, No.12, VII.1919, 5, 25; S.Katayama, “ Radicalism In Japan, ” *Gale's* [title changed], Vol.3, No.3, X.1919, 4.

『ゲイルズ』の石本に関する二つの記述によれば，「有能でまじめな若い日本人共産主義者である同志石本恵吉」は，1919年秋にニューヨークからロシア行の計画を手紙で知らせてきた。そこでゲイルらは，第３インタナショナルへ自分たちの党（1919年９月７日に暫定的に組織されたメキシコ共産党）を代表して国際書記（G.Barreda）を派遣するには資金がなかったので，石本に信任状を与えた。「党は同志石本によって十分に代表されるであろう。ノルウェーのクリスティアニアで投函され，受け取ったばかりの彼からの［1920年］１月９日付書簡によれば，彼は２，３日中にはロシアにいて，計画されたような第３インタナショナルの諸会議に出席するだろう，と。」しかし，石本はロシアに入国できなかった。“ Report of Communist Party of Mexico to the Third International, ” *Gale's*, Vol.3, No.8, III.1920, 6; L.A.E.Gale, “‘ Bolsheviki Gold' in Mexico, ” *ibid*., No.11/12, VI.-VII.1920, 27.

なお，石本がニューヨークを発つ様子は，数年後田口によって小説風に記述された（上掲「亡命者」）。その中では，日付が三日早められていたが，そのことは H.Hoshi［片山潜］の平本忠，西村義雄他二名宛［1920年］７月２日付書簡で確認できる。「丁度一月三日に我か同志の一人石本恵吉氏（男爵）が入露の目的で当地を立たるゝので僕は早朝ニュージェーシー州ニューワークの一ピヤーへ行き二三の同志と石本を見送」った。二村, 前掲論文, 3. 「一月三日」とは，本書簡の書き出しにあるまさにその日であり，前日夜に始まったいわゆるパーマー・レイドをその時まだ片山は知らず，見送りから戻って彼は地下潜行を余儀なくされた。

（３）　恐らくスウェーデン社会主義左派ストレム（F.Ström）であろう。1917年のロシア２月革命勃発以来，中立国の北欧が革命ロシアと欧米を結ぶ中継点として果たした役割は大きく，コミンテルン創立後は，1919年４月14日の同執行委員会ビューローでの決定によりスカンジナヴィア・ビューローが設立された。そのメンバーの中でとりわけストレム（彼は1919年１月末にストックホルムのソヴェト政府代表ヴォロフスキーがスウェーデン政府により追放されたあとソヴェト政府代表を兼務していた）が，通信および資金提供で中心的役割を担っていた。ストレムはリュトヘルスに1920年４月６日付書簡で，同ビューローが週３回モスクワと直接接触しており，届けられた印刷物や書簡はすべて９日でモスクワに届けることができることを保証していた。РЦХИДНИ, 581/1/95/10-11.

（４）　３名のイニシャルと考えられ，いずれも訪米中に片山と知り合い，時に行動を共にしたトロツキー，コロンタイ，ブハーリンと推定される。

Ⅰ-③　1920年４月18日　S.K./N.Y.City to “ Dear comrade ” [S.J.Rutgers]
РЦХИДНИ, 497/2/2/135-140 (6×; autograph)

・２月25(ママ)日，私はあなたに長い手紙［Ⅰ-②］を書いた。４月16日に私は［娘］やすと会い，彼女が Dr Bunker [1] 宅で受け取った１月15日付のあなたの手紙 [2] を得た。
・私は今しばしばほとんど毎週その都市［ニューヨーク］に来ているが，ほとんど誰も見ない。というのは皆が私の知らないところで忙しい。私は今後あなたにニュースか資料を送るつもりだ。私は日本にもいくらか送っているし，またいくらか翻訳している。私はまだ自由ではなく，私の郵便物は検閲されている。
・アメリカにいる我々共産主義者は日本軍によるウラジヴォストーク占領を恥じており，それで我々はそれへの反対抗議［Ⅰ-③a］を送った。あなたのビューローはそれを得るだろう。
・やすはまだ［ダンスの］勉強をしている。我々はヨーロッパへ行きたいが，しかしこれまでのところ全く希望がない。
［以上がリスト135-137で，以下がリスト138-140である。］
・日本については，今最も興味深い時がまさしく始まったばかりだ。労働者は決然としたやり方でますますストライキに入っている。サボタージュは公然と宣せられ，大衆行動でもって遂行されている。神戸の川崎造船所では，１万６千人の労働者がサボタージュを10日間行い，賃上げを獲得し，サボタージュ中の日数に対して１日８時間分の支払いを受けた。八幡官営製鉄所労働者のストライキは，ストライキの歴史の中で最大であった。それは２月上旬に起こり，創業以来初めて溶鉱炉の火が消えた。２万５千人の労働者が職場に戻ったけれども，政府は約束を果たさず，再び２月24日からストライキに入った。今度は政府はロックアウトで応じ，軍隊の出動を要請した。
・最近，男子普通選挙運動が非常に強力となった。政府は２月26日に議会を解散し，選挙は５月10日に行われるであろう。普選運動のために働いている人民は，すべて急進的運動に賛成であり，その運動を目的達成のための手段として使おうと欲している。ボリシェヴィズムは日本において今や全くポピュラーである。

本史料は厳密には，リスト135-137が書簡で，137の末尾に署名（S.K.）があり，リスト138-140は原稿で，内容からみて138，140，139の順であり，片山自身が２と３のページ付けを誤っていた。後者は，リュトヘルスによる直しを経て『トリビューネ』に 以下のまえがきを付して公表された。「ニューヨークにいる我々の党員片山潜から我々は一通の書簡を受け取った，そこから以下を印刷する。」“ Een brief van Sen Katayama, ” *De Tribune* (Amsterdam), Jg.13, No.197, 27.V.1920, 3. その内容はまた，５月10日の選挙の結果を加えて，『ゲイルズ』1920年10月号論文の後半で繰り返された。S. Katayama, “ Revolutionary Influences in Japan, ” *Gale's*, Vol.4, No.3, X.1920, 10-1.

（１）　Ⅰ-②によれば，Dr Jane Bunker は歯医者で，やすの歯を矯正した。

（２）　その手紙は，同じくリュトヘルスがマルテンスへ宛てた1920年１月１日付書簡などとともにロンドンで検閲にあい写真がとられ，アメリカ政府の入手するところとなったが，写真自体が綴じられたファイルは未だ見つけられない。Cf. Records of the Federal Bureau of Investigation [1908-1925], RG65, File No.205492-617, NARA.

Ⅰ-③a　1920年４月10日　Protest against the Military Seizure and Occupation of Vladivostok by the Jap's Army. S.Nonaka./Unzo Taguchi./Sen Katayama./The Committee for the Japanese Socialists[*sic*] Group in America.
РЦХИДНИ, 497/2/2/125-128 (5×; autograph)

・我々，在米日本人社会主義者は，４月５日のウラジヴォストークの軍事的占領において頂点に達した，シベリアでの気違いじみた，盲目的な，そして最も非道な日本の行為に断乎として抗議する。
・我々は知っている，ウラジヴォストークにおける現在の無法行為がまさしくロシア労働者と農民を煽るであろうことを，また，日本はその行為のために高い代償を支払わなければならないことを。
・その占領は長くないだろう。というのは，我が人民はロシア人を我々の敵とするような悪事を支持しないだろう。それからソヴェト・ロシアの赤軍が日本帝国主義を破砕するだろう。ロシア赤軍の勝利は，日本における社会革命とソヴェト政府を意味するだろう，まさしく日本の勝利が1904年にロシア憲法を，そして1905年革命をもたらしたように。
・我々はウラジヴォストーク，シベリア，ロシア，そして世界中の我々の同志たちに心からの挨拶を送る。

片山ではない手書きの本稿は，所々リュトヘルスによって直され，また彼の筆蹟で最後５枚目の左上余白に“9-5-20”とあり，５月９日に受け取られている。日付のあとに括弧に入れて「レーニンの誕生日」（ただし露暦）があり，末尾にリュトヘルスへの宛名に続いて「どうかこの声明書をすべてのロシア同志へお送り下さいますように」とある。それをリュトヘルスは，彼のウェインコープ宛５月［２月とあるが，それが誤記であることは内容から明らか］21日付書簡によれば，Kr.［クリスティアニア］のノルウェー社会主義左派トランメル（M.Tranmæl）へ，来るコミンテルン第２回大会で取り上げられるためのインドの友人たち［ロイ夫妻］による声明書などとともに送った。それはまた，『トリビューネ』編集者でもあったウェインコープへ１部が回され，同誌に以下のまえがきを付して公表された。「在米日本人社会主義者グループ委員会の名で，日本軍によるウラジヴォストークの軍事的占領に反対する以下の抗議が我々に送られてきた。」РЦХИДНИ, 581/1/47/51; “Protest van Japansche socialisten,” *De Tribune*, Jg.13, No.198, 28.V.1920, 3.

それより先，アメリカではロシア・ソヴェト政府ビューロー機関誌『ソヴェト・ロシア』に公表された。“Japanese Socialists in America,” *Soviet Russia* (New York), Vol.2, No.20, 15.V.1920, 483-4. 同声明の日本での公表は，かなわなかった。同声明が秘密裡に堺利彦のもとに送り届けられたのであろう，彼は５月23日の日記に以下のように記し，それを公表するのが精一杯だった。「浦潮占領抗議書／在米日本人社会主義者団の片山潜，野中誠之，田口運蔵の三氏は，日本政府の浦潮占領に対する抗議を発表した。」『新社会評論』７巻４号, VI.1920, 18.

Ⅰ-④　1920年５月14日　K[atayama]/N.Y. to S.J.R.

РЦХИДНИ, 497/2/2/174 (2×; autograph)

・S.P.［アメリカ社会党］会議とそれが為したことについての，またいわゆるレフトウィングについても，切抜を送る。［社会党全国執行委員会のある］シカゴの人々は結局妥協的以外の何ものでもない。ヒルキットは依然力をもっており，彼は自らが反動であり，ソヴェト・ロシアに敵対していることを告白した。そのことは何ら驚きではないが，私にとって大いに驚きなのは，今日においてさえ多くの社会主義者がヒルキットによって書かれた綱領や方針を支持していることである。私はそれらの切抜を送る。デブスは社会党とセント・ルイス［臨時党大会で採択された1917年の反戦］綱領に盲目的に忠実だが，彼はニューヨークでの社会党会議が為したことを読んだ時社会党の大統領候補者に選ばれたことを後悔するであろう，と私は確信する。

Ⅰ-⑤　1920年５月29日　K[atayama]/N.Y. to S.J.Rutgers
РЦХИДНИ, 497/2/2/185-186 (2×; autograph)

・やすは Dr Bunker からあなたが最近良くないと聞き，それを私に語った。私は最近３カ月いなかで働いている[1]。
・４月５日に始まった日本の軍事行動は侵略の形態をとってはいないが，愚かな不明瞭な行為であった。日本軍は革命軍を武装解除しようとしたが，しかし彼らの第一の目的は，ロシア人によって支援され，武装されたウラジヴォストークの朝鮮人革命党［韓人社会党］本部をつぶすことであった［「四月惨変」］。
・私が以前あなたに書いたように，日本はロシアとの戦争へは向かわないだろう。なぜなら日本人は概してその戦争に反対である。憲政会でさえ戦争に反対している。日本軍国主義者が好戦的行為を停止するであろうもう一つの大きな理由は，財政的なパニックである。

（1）　この時期，岩崎清七から片山父娘への資金援助は続いていた。岩崎は横浜正金銀行東京支店から片山やす宛に712.50ドル送金し，それは1920年６月10日にやすに支払われた。その前は1919年11月20日に，同じく岩崎からの送金300ドルを片山は受け取っている。РЦХИДНИ, 521/1/74/1.

Ⅰ-⑥　1920年６月23日　K[atayama]/New York to R[utgers]
РЦХИДНИ, 497/2/2/23-24 (4×; autograph)

・20年６月６日のあなたの手紙［未詳］がニューヨークからニュージャージーへ転送されてきた。その手紙と，横浜へのもう一つ［Ⅱ-③; 同解説参照］，ありがとう。
・［Ⅱ-③で述べられた］極東における見通しについて，私はあなたの意見に賛成だ。ちょう

ど今，私はシベリア・ロシアと日本との関係についてかなり長い論文を書いている。ブルジョワ新聞にはニュースがほとんどないか，あっても歪められている場合もあり，社会主義新聞でさえニュースが反日的トーンで染められている。それで，最近２，３カ月の出来事の摘要を書く価値があると私は考える。私は多くの資料を集めているし，私的な通信者をもち，個人的にもたらされた日本からの直接的なニュースももっている。完成後，数部コピーをとり，一部をあなたに届けるつもりだ(1)。

・ボリシェヴィキ革命とその成功した仕事を語ることは，社会主義的宣伝の最良の方法だと考えるので，それで日本から当地にやって来，ここから戻っていく日本人の中へのボリシェヴィキ的プロパガンダを行うために私は非常に激しく働いてきた。

・日本政府と人民はシベリアへの攻撃的政策にいくぶん反対し，シベリアから兵を撤退させたいという気持ちに傾いた。しかし，ニコラエフスクでの事件でもって日本の軍国主義者は，シベリア政策に関する全権を自らのものにし，シベリアにおける兵を７万人まで増やし，ウラジヴォストークや他の重要都市を占領した。政府は兵を制止するいかなる力ももたない。日本は既にシベリア遠征に約８億円使い，すぐにそれは10億になる。日本はシベリアの戦争を続ける財政的な力をもたない。それは非常に明らかであり，上記の論文でより詳しく述べよう。

・日本における可能なボリシェヴィキ革命について，それは西洋のより産業的に進んだ国々よりもより早いだろう。日本には実際にボリシェヴィズムのための準備がある。マルクス主義は他のいかなるところより熱心に学ばれている。マルクスの『賃金，資本および労働』［『賃労働と資本』の誤記］が京都大学の河上［肇］教授によって翻訳され，雑誌［『社会問題研究』1919年４月号］に公表され，それは直ちに７万部が売れた。社会主義者がなお日本では抑圧されているということは非常に矛盾しているように思えるが，それは事実である。けれども，彼らは活動的で，徐々に人民の中に影響力を得つつある。

・日本の村落における原始的な共産主義的経験について，我々は琉球を研究したことがあり，それらについて将来より多くあなたに書くつもりだ(2)。『東洋経済新報』の Mr.T.Isibasi［石橋湛山］にあなたは手紙を書いてほしい(3)。それらのテーマの事実か統計をあなたは確実に得るだろう。

日付が“Jan”とも“Jun”とも読め，アルヒーフの整理は１月の日付でなされているが，内容から明らかに６月である。

（1）　日本の干渉政策を包括的に論じたその長編論文は，すぐには完成しなかったようだが，それにしても一年以上たってオランダ共産党系の理論誌『ニーウェ・テイト』1921年９月５日号に掲載された事情が，編注まえがきで触れられている。「本稿はいくらか前から編集部の手もとにあるが，しかしスペース不足のためにより早く載せられ得なかった。それはとくに同志片山潜のコミンテルン第３回大会への報告「来るべき世界革命における日本の立場」［若干表題を変えて次号掲載］への導入としてみなされる時，その価値をなお失っていない。」なお，それより先『ゲイルズ』1920年12月号に同タイトルの論文を片山は寄稿しているが，両者は別々に書かれ，細部は互いに異なるものの，内容はほとんど重なるものだった。Een

Japanner [S.Katayama], “De werkelijke Siberische politiek van Japan,” *De Nieuwe Tijd* (Amsterdam), Jg.26, No.16-17, 5.IX.1921, 545-56; S.Katayama, “Real Siberian Policy of Japan,” *Gale's*, Vol.4, No.5, XII.1920, 14-5, 28; cf. Yamanouchi, *op.cit*., 31.

（２）　そのテーマに関して「共産主義は日本人にとって全く外来ではない」との主旨の論文を片山は『コミュニスト』1921年４月号に公表した。S.Katayama, “Communistic Practices in Japan,” *The Communist*, Vol.3, No.1, IV.1921, 19-20.

（３）　『東洋経済新報』が毎号片山の元へ届けられるだけでなく，直接同誌との文通が続いていた。例えば，1920年11月16日に一編集者（「鎌倉から」とあるので石橋編集長）が片山へ「日本における今日の状態」について書いてきた。S.K., “Japan in Relation to the World Revolution,” *The Communist*, Vol.2, No.16, 5.I.1921, 7.

Ⅰ-⑥a　日付なし[1920年７月以降]　Ill-User of the Nikolaevsk Affair
РЦХИДНИ, 497/2/2/238-242 (10×; Katayama's autograph)

Ⅰ-⑥で言及されたシベリア関係論文（注１参照）とは別に，本訳稿を片山はリュトヘルスに送った。タイトルの“Ill-User”が“Abuse”とリュトヘルスの手で直されており，オランダでの公表が考えられていたであろうが，その公表が実現した形跡は見あたらない。

原稿末尾に以下のように，原著（「尼港事件の悪用者」『東洋経済新報』902号, 26.VI.1920, 7-8; 903号, 3.VII.1920, 7-8）とその訳（厳密には，要点を抜粋したうえでの英訳）であることが記されている。“Oriental Economist, Tokyo (Editorial), in issues June 26 and July 3d, 1920./Translated by [Katayama].” のちに片山は尼港事件の論文を『ゲイルズ』1921年３月号で公表したが，その中身をみると本訳稿を推敲したものにすぎず，訳稿であることへの言及はなされていない。S.Katayama, “The Nikolaevsk Affair,” *Gale's*, Vol.4, No.7[8], III.1921, 20.

Ⅰ-⑦　日付なし[1920年７月以降]　[Katayama] to R[utgers]
РЦХИДНИ, 497/2/2/197-198 (2×; autograph)

・あなたからの５月21日付［未詳］と６月６日付の手紙を受け取った。
・私は戦術についてあなたに同意する。私も暴力に反対する。公然たる暴力を主張することは愚かな戦術である，と思う。それは良い結果をもたらさず，運動に害となるだろう。我々に必要なのは，共産主義の目的・原則や非妥協的な立場について労働階級に徹底して教育することである。我々は平和を主張し，自らを平和的にふるまうべきである。労働者の力は暴力行為の中にではなく，平和的で静かな休息と無活動の中にある。労働者のこの態度を“strike”と呼ぶのは不幸である。今アメリカのいくらかの労働者たちはそれを休暇（a vacation）と呼んでいる。
・私は２，３日中にＦ.［フレイナ］への［スパイ容疑の］告発について書こうと思っている。私は出来る限り多くを調査した。なぜ会議［Ⅰ-①注６参照］が襲撃されたか，あなたは私に

書くことができるか？当地では反対者たちが Clara Z[etkin] によってＦ.に反対して表明された意見を利用している[(1)]。

（1）　ジャネット・パールのリュトヘルス宛1920年７月15日付書簡には，「『クラス・ストラグル』の L.L.［ローレ］は，クララ・ツェトキンがどこかに打電してきて，それ［フレイナの無実］が真実であるか疑っている，と主張している。どうかこのうわさの電報をあなたに調べてもらいたい」とある。РЦХИДНИ, 497/2/2/220-224. その現物を確認できないが，ツェトキンの表明は恐らくアムステルダム・サブビューローとベルリンの西欧書記局との確執が背後にあってのものであったろう。Cf. *Bericht über den 3. Parteitag der Kommunistischen Partei Deutschland (Spartakusbund) am 25. und 26. Februar 1920* (n.p, n.d.), 76-85.

Ⅱ　在横浜杉山正三とリュトヘルス

Ⅱ-①　1919年６月４日　Shozo Sugiyama/551 Nishitobe, Yokohama to Dr.Ratgers[*sic*]
РЦХИДНИ, 497/2/2/193-194 (2×; autograph)

・あなたが当地を離れて以来，日本における社会主義に関する傾向は大いに変化した。民主主義や社会主義の名はほとんどの新聞，雑誌にみられ，今や労働運動は徐々に増しつつある。堺［利彦］氏と（決議文を持参してあなたを横浜駅で見送った）山川［均］氏は，社会主義を宣伝するのに活動的である。大杉［栄］氏と荒畑［寒村］氏は，実際の労働運動に熱心に従事している。横浜においてさえ，我々は一労働組合［横浜労働組合期成同盟会］を組織し，雑誌［『横浜労働新聞』］を発行しつつある。
・私について言えば，昨年12月から病床にあり，３カ月間いなかにいた。２，３日前に横浜に戻ってきたばかりだ。あなたの二人の息子とMr.――[(1)]が，親切にも２月に私を訪問してくれた。私は一度あなたの手紙［未詳］を得た。それを私は東京の同志たちに回した。私は今 Kelly & Walsh (Book-sellers)［英国人書籍商］にはいない。もし私に手紙を送るなら，私の兄弟である以下へ。c/o Yuzo Sugiyama No.551 Nishitobe, Yokohama.
・追伸　私は死ぬことはできない，この時機に死ぬつもりはない。R.....［革命］が来つつあり，我々が予期したよりより早く来るだろう。私は活動的でなければならず，どうしても私の健康を回復するつもりだ。

本書簡は，署名と同志の名を伏せ「1919年６月の横浜からの手紙」として『トリビューネ』に抄訳・掲載され，その際，著者の病気が結核であることが付記された。“ De stemming onder het Japansche proletariaat, ” *De Tribune*, Jg.12, No.253, 31.VII.1919, 3.

（1）　恐らくクレース（P.Klees）であり，訪問は彼が帰国をめざすリュトヘルスの息子ヤンとウィレムを伴って２月16日にアメリカに向けて出帆する直前のことであった。山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル（Ⅵ）」『宮崎大学教育学部紀要』社会科学, 72号,

IX.1992, 18; 同「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル（Ⅶ）――第Ⅵ篇のための補論――」同上, 75号, XI.1993, 5.

Ⅱ-② 1920年３月27日 S.Sugiyama, c/o Sekine Uhachi/3,535 Kugenuma, near Yokohama to Dr.J.Ratgers[*sic*]
РЦХИДНИ, 497/2/2/58-60 (3×; autograph)

・１月８日付のあなたの手紙［未詳］を落手。再び帰国していることを知ってうれしい。昨年８月の私のリュトヘルス夫人宛書簡は，不明になったようにみえる［Ⅱ-③参照］。
・横浜では小池［潔］氏と吉田［只次］氏が当地の運動で非常に活動的であったが，不幸にも吉田氏は昨年12月以来刑務所に入れられている。山川氏と堺氏の名はたえず大手雑誌に現れているが，しかし彼らは何ら現実的な運動に参加していないように私には思える。日本社会主義運動の“a lion”である大杉氏は今東京（中野）の刑務所にいるが，あなたがこの手紙を読むときは出ているだろう。
・労働者のストライキはこのごろ非常に頻発しており，物価は毎日上昇している。昨年来普選運動が非常に活動的で，普通選挙法が衆議院に上程されたが，政府は議会を解散した。総選挙は５月10日に行われる。［政友会，憲政会に触れたあと］人民はいかなる政党も好んでいない。直接行動，直接行動（Direct Action, direct action）以外の他の道はない！
・あなたの要求に応じて，本日私はまた H.スネーフリート氏に手紙を送った[1]。
・私の手紙の内容を大いに助けるであろういくつかの新聞の切抜を同封する。

（１） この時期スネーフリートは日本行を計画しており，実現しなかったその計画の顚末については，以下を参照。山内「リュトヘルス（Ⅶ）」6-14. リュトヘルスをはじめ複数の関係者の手を煩わせたその計画に，杉山までも（その中身は未詳だが）関与したことがここに明らかとなった。

Ⅱ-③ 1920年５月27日 [S.J.Rutgers]/Amersfoort/van Campenstraat 2 to Sugiyama
РЦХИДНИ, 497/2/2/179-178 (3×; typed)

・私の日本人友人のいく人かの闘争と犠牲についてのニュースを伴った，あなたからの３月27日付書簡［Ⅱ-②］をまさしく受け取った。あなたからの1919年８月付書簡[1]も届き，バルタが私の帰国前に返事を出し，また彼女はあなたの書簡の大部を名を伏せて『トリビューネ』に公表した。帰国後私は，その手紙を読み，あなたの熱意と主義への献身に感動した。
・私の友人である吉田と小池に私の心からの挨拶を伝えてほしい。吉田は私が訪れた最初の日本人友人であった。私は彼の家とまた我々がＹＭＣＡでもったすてきな晩餐会を覚えている。もしあなたに機会があれば，偉大な大杉氏（great M.Osugi）と他の友人たちにも伝えることを忘れないで。

［以下が，公表分である。ただし，下線部の１パラグラフは公表されず。］

・疑いなく，レフトウィングと直接行動は前途があるだろう。ロシア革命は，すばらしいやり方でその革命の方法を示した。ロシアにおいてよりも，真の行動のために西洋の労働者がより多く準備していないのをみて，私は大いに失望している。最悪の部分は，労働者自身が資本主義世界の全く一部になっていることである。彼らはブルジョワ精神やブルジョワの利害に染まっている。過剰に産業化された国においては，外部の援助や干渉（食料や原材料）なしには新しい経済生活を築くのは物質的にすら不可能である。しかし，このことは最悪ですらない。なぜなら最大の困難は，科学と指導性の独占を，全般的にはブルジョワ文化を打破することである。

・ソヴェト・システムは非常に変通自在で，ロシアにおいてのように，小作農や手工業等に採用されうる。このことが可能かどうか，いかに可能かを知るために，我々はロシアの偉業に照らしながらそれらの条件を学ぶべきだ。この点について，あなたがた自身の判断によって，また現代語で公表されている限りの文献を送ることによって，我々を手助けすることができないか。私があてにしているのは，農業所有の状態（原始的共産制の遺物あるいは小作農等の）や小企業，手工業等の労働者の状態に関するものであり，日本についてだけでなく，中国，朝鮮，シベリアについてもである。また日本社会主義者の立場から，中国における状態をより接近してあなたがたが学ぶことは大いに価値あることであろう。日本と中国の革命家の間に密接な共同が必要であろう。日本は帝国主義的理由のために中国の支配を求める。それ故，日本社会主義者の第一の義務は，この政策をくじくことである。我々は，世界革命の大問題のために，極東における発展がきわめて重要であることにますます目覚めつつある。

タイプによる本書簡は，アムステルダム・サブビューローの寝耳に水の解散決定（Ⅱ-④a 解説参照）を知らされた直後であったからでもあろう，西洋の当面の運動への失望から，東洋の運動への期待が表明され，世界革命のために極東，とりわけ日本と中国での発展がきわめて重要とみなされた，その内容において注目される。それは，私的な記述である最初の４パラグラフと最後の１パラグラフと，既に本文で注記した途中の１パラグラフが省略され，宛名を伏せて，アメリカ共産党機関誌『コミュニスト』に公表されたのだが，Ⅰ-⑥にあるように，その掲載は在米片山経由で届けられたからである。事実，アメリカから無署名の５月27日付書簡が杉山の元へ送られた記録が，アムステルダム・サブビューローの通信文書類一覧にあるが，それは本書簡のこととみられる。“A Letter from S.J.Rutgers to a Japanese Comrade,” *The Communist*, Vol.2, No.9, 1.IX.1920, 5; РЦХИДНИ, 497/2/8/13-18.

（１）　本書簡は以下に掲げる理由で1919年６月４日付書簡（Ⅱ-①）のことだと，編者は推定する。第一に，本書簡が『トリビューネ』に抄訳された形跡は見あたらない。第二に，本文に記されたバルタによる『トリビューネ』への公表は，既述のように，６月４日付書簡に対してなされている。そして第三に，本文にある「あなたの熱意と主義への献身」もまた６月４日付書簡の中にみられる。恐らくⅡ-②で杉山が「昨年８月の私の書簡」と誤記し，リュトヘルスも日付を確認することなくそのまま返事したのであろう。

Ⅱ-④　1920年６月21日　Shozo Sugiyama/530 Mayeta-machi, Yokohama to S.J.Rutgers/ Leidschestraat 23, Amsterdam, Holland
РЦХИДНИ, 497/2/2/208 (2×; autograph)

・私はあなたの手紙と『ブレティン』［複数］(1) を［前の住所］鵠沼で受け取り，後者は同志に配った。
・昨年投獄された吉田氏が，刑務所から最近出てきた。判決は彼に有利だったが，しかし訴訟代理人が判決反対を訴え，それで彼はのちに東京の上訴裁判所で再審議されるだろう。
・私は上記の住所に移ったがしかし，近所にもう一人の杉山がいるのがわかったので，私に手紙を書くときは Shozo Sugiyama と書いてほしい。
・大杉氏の論文の訳［Ⅱ-④a］を同封する。それは我々の労働運動について何かをあなたに語るだろう。

（1）　アムステルダム・サブビューロー機関紙のことで，２月の創刊号に続いて３月に最終となる２号が出た。

Ⅱ-④a　The Turning of the Labor Movement
РЦХИДНИ, 497/2/2/209-211 (6×; autograph)

原稿末尾に以下のように，原著（［大杉］栄「労働運動の転機」『労働運動』5号, 30.IV.1920, 1）および訳者が記されている。“ Original sentence is by Mr.S.Osugi in the “ Labor Movement ” No.5 pub. apl. 30, 1920 translated by Mr.S.Sugiyama. ”

本訳稿は,『ニーウェ・テイト』にリュトヘルスの名で掲載された。S.J.Rutgers, “ De Japansche Arbeidersbeweging op een keerpunt, ” *De Nieuwe Tijd*, Jg.25, No.16-17, 25.VIII.1920, 552-4. オランダ語訳は忠実な全訳で，一箇所だけ簡略化して訳されているが，杉山の英訳自体がそうなっていた。なぜか杉山の名は記されていないが，リュトヘルスのまえがきには原著が以下のいささか的はずれな文とともに記された。「それは刑事起訴の回避のために正しい理解についても慎重なやり方についても述べられている注目すべき論文である。」

本論文も編者は前掲英文論文で, 在米日本人社会主義者団経由で送られた可能性を記していたが, ここに杉山が訳し，直接送ったことが判明した。Yamanouchi, *op. cit*., 30-1.

以上Ⅱ-①から④a の文通によって，これまでの研究が杉山の果たした役割を見落としていたことが明らかとなった。リュトヘルスは滞日中から離日後も日本国内の社会主義者との接触については, 大杉に近い杉山，吉田らと実質的に密であり，堺，山川らとは1918年の決議書簡「ロシアの同志へ」および1917年のメイ・デー決議のリュトヘルスへの委託を除けば，むしろ疎遠に近かったことが判明した。あえて推測すれば，政治・思想的立場の違いが堺，山川らをして杉山経由の情報等へ消極的姿勢をとらせたのか，あるいは杉山がその情報伝達に本気で取り組まなかったのか，文面からだ

けだと前者のように思える。

少しさかのぼるが，大戦終結直後1918年12月１日付書簡でもって堺と高畠素之がインタナショナルとの接触を再開するにあたり，その相手が相変わらず第２インタナショナル事務局であったことの問題は，既に別稿で論じた。山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル（Ⅷ）」『宮崎大学教育学部紀要』社会科学, 79号, VII.1995, 26-7. それから一年以上たった『新社会評論』1920年３月号の堺の「時評」においても依然，第２インタナショナルと第３インタナショナルを並べて「此の二種の国際社会主義が今後如何に反撥し，或は如何に融合するかが，亦実に大いなる見ものである」と記していた。同じく1920年６月号の山川と堺の「海外時評」においても，「第三インタナシヨナルはモスコウに執行委員会（本部）を置き，更に国際共産党大会を開催する準備の為，和蘭のアムステルダムに支部を置き，アンリエツト・ローラン[ト]・ホルスト（婦人）が主としてその世話をしてゐる」と，「反対するにも，賛成するにも，先づ内容を知る事が大切である」との立場から記されるにとどまっていた。『新社会評論』７巻２号, III.1920, 9; 同, ４号, VI.1920, 23. この時既に，1920年４月30日のコミンテルン執行委員会の決定にもとづき，５月４日の無線電信でアムステルダム・サブビューローの解散指令が発されていた。РЦХИДНИ, 497/1/9/1; cf. 497/1/9/7-9. 日本社会主義者の本陣は，コミンテルン・アムステルダム・サブビューローとの接触をもたないままにおわった。

［付記］　本稿は1999年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）による研究成果の一部である。

（やまのうち・あきと　宮崎大学教育文化学部教授）